慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	仏教の興立と商人階級の活動
Sub Title	
Author	友松, 円諦
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.2 (1925. 2) ,p.251(99)- 278(126)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250201-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

するの點に於て、當時の社會主義的ジャコビン黨Tkačev に同意した而も彼は多くの點に於て此等三者に相違して居た。明かに彼は、革命主義的宣傳は先づ大衆運動なくして行はる可き事、並に全革命主義的活動は先づ Tkačev の徒の企圖するが如き陰謀手段の程度に制限す可きものと考へたのである。加之、彼が社會的政治的權力としての國家の是認は勢ひ革命黨に依る國家權力の略奪の主張を伴ふものであつて、此の點に於て、かの、國家及び其の中央集權主義的權力は速かに若くは漸時的に全く廢止せらる可きであるとする Bakunin 及び Lavrov の主張と根本的に乖離するものであつた。（Kulczycki a. a. O. SS. 62-63 參照）

要之、既にLavrov の章に於て指摘したる如く、此等當年の露西亞社會思想家の學說は政治的、社會的運動の潮流を科學的に合理化するの意圖を包藏せる一事極めて明白なる所であるが其の希望する所も亦峻嚴なる專制的獨裁の支配に對する徹底的の鬪爭にありし事は、結局に於て國家權力を是認する所のミハイロヴスキイに於ても異なる所なく、唯 Bakunin 及び Lavrov が進んで無政府主義的國家否定の敎義を標榜して以て專制主義的抑壓的國家權力に對抗せるに反し、前者は先づ何よりも專制的支配に對して個性を防禦するの必要を痛感し、彼の所謂眞理と正義との融和合致を理想とするプラヴダ主義を提唱したるものである。ミハイロヴスキイの社會主義は畢竟人道主義的倫理的論理的適用である。而して個性は彼の社會主義の Alpha であり Omega であつた。此の哲學及び社會主義に於ける倫理的傾向の高調こそ實に露西亞主觀主義學派の最も著るしき特長である。

ラヴロヴ及びミハイロヴスキイの思想が當時の急進的知識階級に與へたる影響は甚だ深刻であつた。例へば「民衆の中へ」（V'Narod）の革命的社會運動に於て我々は曾に革命主義的宣傳の共同目的によつて集合したるのみならず、更に個性の尊重といふ倫理的目的に依つて結合團結したる幾多の結社を見るであらう、併し此等の事情に關しては玆に縷述するの煩を避け、後日七拾年代以降の露西亞社會運動の實際を檢するの時に於て詳述する事に仕度いと思ふ。

（附記）本編は本誌第十八卷第七號—第九號所載拙稿「農奴解放後の露西亞社會運動」の續稿として草したるものであつて、後日の機會に讓れる「七拾年代の實際的社會運動」の一篇と相俟つて之が全篇を成す可きものである。玆に此の旨を附記して偏へに讀者の御諒承を乞ふ次第である、

佛敎の興立と商人階級の活動

友松圓諦

一、時代の大勢と商人階級の擡頭

アーリヤ（Aryan）民族の勇敢なる植民運動は闍牟那河（Yamunā）恒河（Gangā）の肥沃なる流域に無數の都市（Nagaraṃ）村落（Gāmo）を產出して所謂婆羅門（Brāhmaṇo）文明の基礎をきづいたのであるが、今や彼等の柘植事業は玆にその鋭鋒をゆるめて、漸次(1)「なれたるところに住居をとる」（esa attano vasanaṭṭhane ālayaṃ katvā）の惰風をかもすに至つた、更に又、この惰風は宗敎的思想と相關係して彼等の開拓せる境域を神聖なる中國（majjhadeso）として自負し、先住土著の雜居せる未開拓地方を邊地（Paccantajanapado）として貶視し(2)、愈々坐居定住の傾向を强からしめたのである。然しながら、佛陀の出現した西紀前第六世紀前後に於ては、これらの宗敎的思想に對する反抗運動は漸く擡頭しきたつて、再び民族發展の曙光を見るに至り、遠く中國の彊域をふみこえて利潤多き邊土異境に交易する多くの商人（Vāṇijo）隊商（Sattho）を

見るのみならず、大海（Mahāsamuddo）に三本マスト（Tayo Kūpakā）の大船（Mahānāvā）をうかべ(3)、方向烏（Disākāko）をとばせて(4)、あらゆる海上の恐怖と戰ひつゝ、遠くセイロン(5)、（Tambapaṇṇi）ビルマ(6)（Suvaṇṇabhūmi）さては、バビロン王國(7)（Bāveruraṭṭhaṃ）にまで廻易するに至つた。かくして時代は經濟地域の擴大に對する黎明期に入つたのである。

中國を根據とする所謂婆羅門文明はその宗教的信仰と植民による先住民族を統御する必要よりして、既にはやく征服者と被征服者との間に嚴重なる四姓（cattāro vaṇṇā）の階級制度を産出し、以て征服者の血液（lohitaṃ）と名譽（Vaṃso）と家業（Kulaṃ）とを清淨に維持せんことをつとめた。四姓とは刹利（Khattiyo）婆羅門（Brāhmaṇo）毘舍（Vesso）首陀（Suddo）の四種姓これである。彼等は自らの「種姓の優秀」(8)（Jātisampanno）なることに無上の價値を認め、その結婚は必ず「種姓の同等」(9)（Samānajātiko）なるものゝ間にのみ許されたのである。然しながら、いかに嚴重なる律法（Dhammo）も恐るべき宗教的刑罰も、つひに人心の奥底にどよめきわく愛念の興盛を脅かすことは出來なかつた。かくして茲に四姓の組合せによる無數の混血種を生じ、混血種は更に多くの混血種を生じ、複雜なる階級制度を現出するに至つたことは何らあやしむに足らない。(10)、しかも、混血による生理的關係と、これら雜混種姓が新たに從事する職業の經濟的關係と、更に又、彼等の多くはつとめて新天地を舊文明境域己外に求めたる地理的關係とは、反つて彼等をして政治的に經濟的に、より自由にして且つ、より優越なる地位を獲得せしめたることは最も注意に値することである。乃ち、佛陀の在世に於ける十六(11)の有力なる民族並びにその國家は殆んど大部分「卑賤の生れ」(12)（apasada）であるところの雜混種姓か(13)、若しくは中國から程遠い邊疆に住むところの野蕃人(14)、（Mlecchas）の後裔で占められてゐると言ふ事實はこの間の消息を正しく示してゐるものと思ふ。佛陀の時代を一轉機として、婆羅門文明の生活原理とも言ふべきこの階級組織は、今やその傳統的桎梏から離れて自由に、且つ自然の方向に遷移せんとするに至つた。しかして、その一つは王者（Rājā）を通じて表はれてきた政治的權力の擴大、他の一つは商人（Vāṇijo）特に卑生（Hīnajacco）に屬するところの商人階級の經濟的勢力の向上である。正統派に對する異端の勝利中國に對する邊疆の優越、宗教的祭祀に對する商業取引の經濟上に於ける有力、これらの時代精神は佛陀の滅後、ほどなくして十六國の大部分を統一した摩竭陀（Magadhā）民族が本來商人の種族(15)であつたと言ふ一つの現象の中に物語られてゐるのである。

かうした階級制度の上に變革を與へやうとしてゐる時代精神が家族制度の上にもあらはれてくることは寧ろ當然なことである。家は通常俱擺（Kulaṃ）と言はれ、家主（Gahapati）家長（Kulajetthako）を中心とする大家族である。次男以下の妻子並にその子孫はたとへ幾分の財産を分與せられたとは言へ、永久にその家族員として家長に尊敬をいたさねばならない(16)。（Kule jetthapaccāyikammakārako）又その家業も七世の家傳(17)（Sattamā kulaparivaṭṭā）であつて、いかに時世に逆行したものであり、いかに利に乏しいものであつてもこれを改易することが出來なかつたのである。

一方、當時に於ける實際の經濟形式を見るに言ふまでもなく一般的には農耕（Kasikammaṃ）

であつて四姓みな悉くこれに從事してゐた。佛教の始祖、佛陀の生家たる釋迦(Sakya)の貴族、しかも王職(rājaṭṭhānaṃ)の被選擧權をもつてゐた彼の實家と言へども、やはり經濟の大部分を農耕に求めてゐたやうである。彼の父、淨飯(Suddhodana)や伯父達の同型の名からして、彼の家、瞿答摩(Gotama)が農業に關係深いことはオルデンベルヒ(Oldenberg)の既に早く指摘してゐるところである(18)。然しながら、いかに豐饒なる印度の風土とは言へ、農事は彼等の忍びがたき勞役であつたことは、不注意に飯(odanaṃ)を取扱ふ沙門を責むるに、「飯の一魂一魂はこれ百苦の賜なり」(19)(ekamekaṃ sittham kammasatena nittāyati)との言葉を以てしたことに明かである。「先づ、田畑を耕し、そして種蒔き、水を引き、水を出だし、草をぬきとり、刈り入れ、收穫を運び、束にたばね、これをふみしめ、藁をひろひとり、粃をぬきとり、風にて吹き、倉に收む。かくの如く同じきことを來年に於てもなすならん。」(20)とは彼らが農耕の一々について耐えがたき勞働を數へたるものであり、「業は終らず、勞にはてしなし。いつ業は終り、いつ勞にはてしあらんや。いつ五欲をもちて安樂あるや、愛するアヌルダよ。業は終らず(Na kammā khiyanti)勞にはてしなし。(Na kammānaṃ anto)父死するも、祖父死するも、彼らの業は完了せざるなり。」(21)とは最も悲痛なる彼等の體驗をいつはることなく告白せるものである。かゝる農業に對する宿命的絶望は、かゝる勞苦忍びがたきをいたせる家族制度そのものを呪咀するに至り、つひにかゝる家族制度から「自由になつて(alaggo hutvā)自分自らを支配する」(22)(attānaṃ eva ovadanto)ところの自由の天地に生きることを願はしめた。この心境にある婆羅門の一青年はつひにかう言つたのである。「いかにして農業などをして父母を養ひうるものぞ」と(23)。今や、農業は勞役の苛酷なるのみならず、父母をも養ひがたいところの經濟的窮地に陷つたやうである。

かうした形式的な家族制度に對する不滿は勢ひ、より容易にして、且つより利潤多き經濟形式を憧憬せしめた。憧憬の焦點は言ふまでもなく商業取引である。從來、北方婆羅門家(Udicabrāhmaṇakula)を以て任じ、祭司(24)(Purohita)教象師(25)(Hatthācariya)官吏(26)(Amacca)教師(27)(ācariya)等の如き社會上優秀なる職業に從事してゐたところの婆羅門種の人々すら、今や經濟上の壓迫によつて門地と名譽とを顧みるに暇なく、遂に商業取引(28)(Vohāraṃ)或は商品(Bhaṇḍhaṃ)の行商(29)を行ふものが現はれた。更に又、彼らのある者は陸上の交易に甘んずることなくして、遠く海上貿易にすら參加したのである(30)。この風潮が婆羅門種に於てさへ起り出した以上、他のより自由なる階級の人々が爭つてこの最も利潤豐かなる陸上交易、海外貿易にはせ集まつたことは當然なことである。カーシ王國の一住民(kāsiraṭṭhavāsimanusso)は、「こゝにて吾らは益することなし」(nirūpakāro esa amhākaṃ)とて父母の家を出て港村(pattanagāmo)にきたり、船夫(nāvikānaṃ kammakārako)(31)となつて海上交易の列に入つた。貴族のあるものは西海岸の要港、須婆羅(Suparā)に於て五百人の賈客を募集し多くの商品を積んで緒伴入海を行つた(32)。今や社會制度はその傳統的思想からの空虛な概念を維持するに過ぎない。經濟力は日に日に社會的勢力の中樞的要素とならうとしてゐる。黃金の力はよく婆羅門の傲倨を屈するに易く、利利の武辨も衣食のためには首陀種の下

に坐するを憚らない風潮となつた(33)。かくして四姓は悉く事實の上に於て階級差別を無視して等しく「海商人」(34)の名を得んことを願ふに至つた。

この時代の傾向が商人階級をして有力なる社會的、並びに政治的地歩を確立せしめたことは次に注意すべきことである。是より先き商人階級も、他の婆羅門村(35)(Brahmaṇagāmo)鍛冶師村(36)(Kammāragāmo)木師村(37)(Vaḍḍhakigāmo)獵師村(38)(Nesādagāmo)織師村(39)の如き同業村たる市場村(40)(Nigamo)を至るところの交通の要路にもつてゐた。同時に又、一つの都市に於ても、他の同業町、料理人屋町(41)(Odanikagharavithi)象牙師町(42)(Dantakāravithi)花輪師町(43)(Mālakāravithi)蓮華町(44)(Uppalavithi)の如きものとは多少組織を異にしてゐたらうと思はれるところの商業組合人(Negamo)の制度が設けられてゐた。市場村に於ても、この組合に於ても同樣に一人の長者(Setthi)が設けられて常に彼ら商人階級の大なる保護者(45)(Bahūpakāro)となつてゐたやうである。この長者の職位は世襲的であつて、勿論財産の豐かな家柄に限られてゐる。內は村民、組合員の利福を計ると共に外にはその經濟力を以て王者の財政官(Dhanapati)として奉事してゐたのである。王者も又つとめて經濟方面の外護者として長者を尊敬し、ひろく政務に參與せしめた。吾人は王舍城(Rājagaha)の長者が自邸の宴會に王者を招く習慣のあつたことを見て兩者の關係の深きを知るのである(46)。

これら恒定的の同業村や同業組合の外に、隊商(Sattho)の組合がある。その引導師(Satthavāha)の首長(Satthavāhajeṭṭhako)(47)も又世襲であり、長者と同じく政治上に權力をもつてゐる。漢譯に大富薩婆(48)(Satthavāha)薩薄主(49)(Satthovāhajetthako)の名の下に王廷の協議に參列してゐるもの乃ちこれである。今や長者居士(Gahapati)薩薄主らは他の工業村落の代表者と共に極めて有力なる政治的地位を獲得するに至つた。乃ち商人らは屢々同業者の集會を行つてその利益を協議し(50)、長者軍居士軍(51)と呼ばれてゐるところの自衛的設備を有し、以て至るところに彼らの經濟力を伸張させたのである。北方、得叉尸羅(Takkasila-Taxila)に發見されたる四箇の貨幣が、その年代に於て多少の相違はあれ、とにかく商人組合(Negamā)なる刻字を裏面に有つことは最も吾人の興味あるところである。(52)

以上の如く商人階級をして社會的に有力なる地位を占據せしめたについては數へがたき程の多くの原因をもつてゐる。今自分はその著しきもの四五を擧げて見やう。

一、邊地、特に海洋方面の開發、農業本位の中國經濟は今や北方の馬羊、並びに欽婆羅(53)(Kambala)(毛織物)南方、特に海洋方面の眞珠(muttā)摩尼(maṇi)琉璃(Veluriya)螺(Sankha)碧玉(Silā)珊瑚(pavāla)銀(rajata)金(jatarūpa)赤石(lohitanka)珠(masāragalla)の如き目に映ゆる珍珠佳寶(54)の開發は大いに商人階級をして冒險的精神を作興せしめたるのみならず、かゝる貴價商品の賣買は自ら商人階級の位置を高からしめた。(55)

二、工業の發達、時代の大勢は工業階級に對しても恩惠的であつたがために、愈々その組合の團結は鞏固となり、帝國主義的風潮は特に武具工業の發達をうながし、其他、ベナレス(Bārāṇasi)に於けるモスリン、東南地方に於ける鐵工業、陶工業、北方に於ける織物業、其他至るとこ

ろに開發されたる鑛山業はその生產品の處分を商人階級に待つべき域に向上した。產地より都市に賣らんとするもの、都市より產地に就くものこの兩種の商人は佛敎經典の至るところに散見する。

三、都市の發達、國家主義の伸展と、物資集散の激增とはこの時代の特色として都市の發達を數へしめた。舍衛(Sāvatthi)沙祇(Sāketa)瞻婆(Campa)波羅奈(Bārāṇasi)拘睒彌(Kosambi)毘舍離(Vesālī)王舍城(Rājagaha)迦毘羅衞(Kapilavatthu)の如き八大城(56)、或は六大城(57)といふものはその代表的のものである。勿論、これらの都市といへども今日から見るならば極めて貧弱なる田舍町と選ぶところが少いであらうけれども、とにかくこれらの都市に於て、特に屢々行はれたる大祭に際して敏活なる物資の集散取引の行はれたることは商人階級にとつて極めて有意義であつた。更に又、有力なる長者商主等は一都市に甘んずることなく、王舍城と舍衛城の如き數旬程の遠隔あるにも拘はらず、互ひに交婚し(58)屢々取引のために往復してゐたのである。(56)これらの外來(60)(āgantuka)商人の取引に見るもいかに都市の發達が商人階級の向上に資したかを知ることが出來る。(61)

四、交通の發達、リス、デヴィズ(Rhys Davids)が明了に吾人に示してゐるやうに、佛敎時代の印度交通は極めて發達してゐたやうである。(62)北方より西南方面に至るもの、同じく東南に至るもの、東西相通ずるもの、三幹線の陸路、恒河の河口よりビルマ、セイロンに通ずる海路、この外海陸の商人が活躍した跡を見る時、かなりの程度に於ける發達をしてゐたやうである。

五、貨幣の發明、その年代については暫く措き、とにかく佛敎時代には既に早く貨幣の使用が行はれてゐた。乃ち今や貨幣の時代に入り、市場の活躍頓に加はり、交易取引に便すること極めて大であつた。商人階級が貨幣を以て示したる威力は當代の目ざましきもの、一つである。

階級制度、家族制度そのもの、弛緩崩壞はこれらの諸原因と相俟つて愈々商人階級全盛の氣運をうながしたのであるが、しかも尙その全盛なるものは所謂、成上り者の不安と寂寞とを感せずにはゐなかつた。商人階級に流入隨伴する高貴の種姓が心中にはたして一縷の平かならざるものあるを見ないであらうか。利益のためとは言へ、忽ちにして成立した雜種多姓の俄か組合が、はたしてよくその團體を維持しえたであらうか。彼等商人階級がいかに右手に溢るゝ黃金を持つもはたして彼らは尙左手を宗敎と思想の祭壇にさしのべずにゐられたであらうか。とりわけ險しい沙漠森林を通ずる商路に、風難波難の數々に心慄ゆる大海に、彼等はよく宗敎なくしてその目的を成就しえたであらうか。更に又、彼らの經濟的活動は只貨財の畜積のためのみであつて、はたしてより高き意志がなかつたであらうか。自分はこれらの疑問をこゝに遺して、商人階級の向上と併行して興立せる佛敎の思想とその生活とを眺め、そこに見出さるゝ兩者の關係をたどつてみたいと思ふ。

(1) Jātaka II. 178
(2) Mahāvagga V. 13(11-12)四分律三九、十誦律二五、
(3) Jātaka II. 190
(4) 〃 III. 384
(5) 〃 II. 196
(6) 〃 III 360
(7) 〃 〃 339
(8) 〃 〃 309
(9) 〃 〃 259, 417.
(10) Manu X. 1-27
(11) A. N. I. 213. IV. 252, 256, 260. Vinaya texis II, 146.
(12) Manu X. 10

(13) 〃 X. 11, 17, 22.
(14) 〃 X. 44, 45.
(15) 〃 X. 47.
(16) Jātaka II. 257.
(17) 〃 II. 163.
(18) Buddha Sein Leben, Seine Lehre seine Gemeinde S. 115.
(19) Cullavagga V. 26.
(20) (21) 〃 VII. 1, 2.
(22) Jātaka II. 186.
(23) 〃 III. 423.
(24) Jāt II. 214, 191. III. 314.
(25) 〃 II. 182, 231, 284.
(26) 〃 II 183, 218.
(27) 〃 II 252, 284, 287. III. 305.
(28) 〃 II. 155, 198.
(29) 〃 II 155.
(30) 摩訶律二八、四
(31) Jāt. II. 196.
(32) 四分律四六
(33) M. N. 84. Madhurā Sutta
(34) 摩訶律二八
(35) Jāt. III. 389 etc.
(36) 〃 III 387 etc.
(37) 〃 II 263 etc.
(38) 〃 II. 159
(39) 十誦律一六
(40) Jāt. II. 232, 254, 244, 227, 236, etc. Cullavagga VII, 1, 1.
(41) Jāt. III. 315.
(42) 〃 II. 221.
(43) 〃 III. 415.
(44) 〃 II. 261.
(45) Mahāvagga VIII. 16, 17.
(46) Cullavagga VI. 4, 1
(47) Jāt. II. 256.
(48) 十誦律二六
(49) 摩訶律一六
(50) 四分律三、十誦律六
(51) 四分律一、一六
(52) Cunningham, Coins of Ancient India p. 63.
(53) 摩訶律三七
(54) Cullavagga IX. 1, 3. 十誦律三三
(55) 摩訶律一二
(56) 摩訶律三三
(57) 十誦律四〇
(58) Cullavagga VI. 4. 1.
(59) 四分律五〇
(60) Jāt. III 390. C. V. VI. 4, 1.
(61) Buddhist India p. 34-41
(62) 〃 p. 103-105

二、佛教の思想並びに生活と商人階級

(a) 四姓平等の思想について

佛陀の生れた雪山（ヒマヲヤ）麓の小さい町、迦毘羅衛(Kapilavatthu)は舊文明の中心からかなりに東方に偏してゐたがために、其地方の多くの町と共に自由思想に富み、その政體も多くは共和制を布いてゐたほどである。從つて自由思想の殿堂とも言ふべき公會堂(Santhāgara)は至るところの町の誇りであつた。多くの自由思想家はこの東方一帶に起り、これらの町々を巡歷教化してゐたのである。勿論、自由思想と共に一般に尙武的精神に燃えてゐたことは植民運動の前衛に立てるものとしては當然であらう。從つて、佛陀の屬してゐた釋迦族が刹利種の選ばれたるものとしての釋迦の自尊心(1)(Sākiyamāno)に富み、勇敢にして、むしろ兇暴(2)(Candā)のそしりを受けた程ではあつたが、同時にその勇氣は威武權勢にも屈せざる美しい民族心でもあつた。彼はこの自由精神の地に生れ、又比較的自由の教育を受けたのである。思索と懷疑とに性向を持つてゐた彼はやがて貴族である彼の父の許を去つて、遠く自由精神のみなぎつてゐた東南地方を巡歷し、遂に摩竭陀(Magadha)の首府王舍城(Rājagaha)に程近い伽耶(Gaya)の菩提樹下で精神的自覺に到達したと傳へられてゐる。

かくして佛陀は自由思想家としてこの興味ある過渡期に出現したのである。彼はたえず批判的精神と自由濶達の態度とを以てすべての問題に臨んだのである。自分は今二三の章句を列擧

して見る。

善き生れに一利あり。されど德（Sīlaṃ）は吾らをたのしましむ(3)。

刹利、婆羅門、毘舍、首陀、旃陀羅（Caṇḍāla）ブックサ（Pukkusā）が茲にて法を行はゞ（dhammam caritvāna）彼らは天に等しくあらん。(4)

力（balam）は決して種姓、家姓、家業、位置、名譽、財産に非ず。さらばこの力はいづこより來るや。智より。（Puāññyā）(5)

生れも、容色もいたづらごと、されど德のみは最上なり。(6)

彼は意志（Mano）と行爲（Kammaṃ）とを重んじ、すべての善惡禍福の原因を茲に求める(7)。從つて善き行爲こそ人生に於て最上（Uttamaṃ）であり、善惡を分別する智（Puāññ）こそ眞實の力（balam）の發するところである。かゝる哲學の前にはすべては自由であり、且つ平等（samā）であつて、いかなる根强い傳統もその影を失ひ、どのやうな威武權勢もその力を消さずにはゐないのである。彼は決して目前の階級組織に反對したり、その首腦者たる婆羅門種に宣戰したりするやうなことがなかつたのみならず、むしろ、頽敗しゆく彼らに滿腔の同情を披瀝して、偏へに古昔婆羅門（pubbatarā Brāhmaṇā）の勝れたる人格（Siluttanā）にかえるべきをさとされた程であつた。(8)。かくして彼の前にはすべては白紙であり、均等であり、何らの差別的愛憎を起すべきものがなかつたのである。

かくして佛陀の周圍にはすべての階級の人々が集まつてきた。然し、一たび彼らが佛陀の弟子となるや、異名（nānānāmā）異姓（nānāgottā）異種（nānājacco）異業（nānākulā）(9) のすべての階級の人々も佛陀の教說に信順することによつて「從來の姓名をすてい」（Gabanti purimāni nāma-gottāni）沙門釋子（Samaṇā Sakyaputtiyā）(10) に歸入するのである。一たび出家（agārasmā anagāriyaṃ pabbajitoā）したものは、もはやいかなる階級種姓の者でもない。ちやうど其は、恒河、閣牟那、阿耆羅（Acisavatī）薩婆（Sarabhū）摩醯（Mahī）の如き大河（Mahānadiyo）が一たび大海に流入するや、それらの從來の姓名はなくなつて、たゞ大海に飯すると同樣である(11)。五河の特殊な水味がなくなつて同一味（Ekaraso）となり、鹹味（lonavaso）となるが如く(12)、佛陀の教團に出家した者は悉く同一なる解脫味（Vimuttiraso）に溶するのである。

かうした佛陀の自由にして、わだかまりのない態度はすべての種姓職業の人々をその周圍にひきつけた。舍利弗（Sāriputta）目蓮（Moggallāna）大迦葉（Mahākassappa）の如き英傑は婆羅門種から、佛陀の親族である提婆（Devadatta）阿難（Ānanda）等は刹利種から、多くの友人知己と共に早く入團した耶舍（Yasa）は有力なる毘舍種から、晩年、戒律の上首として恭敬せられた優波利（Upālī）は釋迦種貴族に多年仕へてゐた首陀種の理髮師(73)（Nahāpito）から各々同一教團に流入した。然して、そこには出家以前の階級差等が全く消え去つてゐる。たとへ、奴隷（Dāso）であつても一たび出家沙門（pabbajito Samaṇo）となつた以上は王者からも尊敬せらるべきものである(14)。摩偸羅（Madhurā）の王、アバンチプツタ（Avantiputta）は嘗て佛陀の弟子、大迦旃延（Mahākaccayana）にかう言つたことがある「自分はたとへ首陀種に屬してゐる者であらうと、彼が出家沙門であるならば、刹利種出の沙門に對すると同樣の敬意を彼に表したいと思ふ。なせならば、彼は以前の首陀種であると言ふ樣子をなくして、只沙門と言ふ名をとつたからであ

る」(15)

四姓に對する平等觀はいかなる作爲をも加へずして自然の裡に均衡平整の方向に對する社會運動を起させるのは當然である。比較的卑賤の位置に置かれたるものにはこの平等觀は天來の福音であり、且つ彼らの自由運動のごとなき支點となりうる。こゝに於てか奴隷の本主の許を走つて僧團に出家するもの(16)、負債者の債主を逃避して僧團に入るもの(17)、或は王臣(18)官人(19)の重職苦役をすて、入門するもの漸く多きを加へ、これに對する社會的批難は佛陀をして度僧に關する手續きに制限を(20)設けしめるに至つたことは注意すべきことである。然しながら更に注意に値することは、これら不自由人に對する反抗的刺戟ではなくして、實力に溢れてゐながら、尙名分に乏しかつたところの自由人(Bhujisso)たる商人階級に與へた加速度的刺戟

指摘した。(21)商人階級はすでに取るべきを取り占むべきを占めた以上、只彼等はその占取を印可認容すべき思想を渴仰してゐたのである。既に實力に於て四姓に優越した位置を獲得してゐるのであるから、只四姓平等なりとの生活原理、人生は何らの先件的制限なくして只現在生活によりて未來を開展しうべしとの自由なる指導概念をうればよいのである。商人階級のかうした思想への願求心は充分に、且つ完全に佛教に於てみたされたことは疑ひないことである。かくして彼らは佛教を信ずることによりて、その思想に立脚することによりて左右名實を具足したのである。

四姓平等の思想が彼此優劣の偶像概念を打破したると同時に、彼此隔歷、自他凝止の偏見を高擧して左右十方に融通變化する自由の原理を與へたることは併せて注意すべきことである。

でなくてはならない。

玆に吾人は一つの微妙なる對照を見る。佛陀は純理の立場によつて四姓の平等一如を主張し且つ自らの周圍にすべての階級の人々をひきつけ、あらゆる別相をすて、同一釋子沙門たらしめた。商人階級は經濟上の實利に立つて、叫ばずして舊文明の傳統と形式とをのり越えて四姓の人々を自らの周圍に雲集せしめ、ひとしくその別名をすて、同一海商人たらしめた。一は大義名分を叫び他は現實財利の上に立脚する。一は理想に發し、他は如是相に集まる。實相儼如たるものがなければ、理想は只光れる星の如きものに過ぎない。同時に又、理論炳として存在するものがなければ、その實利もいまだ浮雲の遺憾がある。佛陀はかくして、四姓平等を主張するに際して、現實目前の社會がいかに經濟力あるものに命令せられて四姓無常であることを

佛陀は家姓家業をすて、僧團に出家するものを抱かれた。自由を憧れて、負ひがたい家業をふりきつてきた人々に自由人の生活を指示された。僧團はすべて自由意志に動止する人々であつた。商人階級の利潤ゆたかなるに心羨やみながらも、尙家業を改易するの宗教的罪惡に怖れつゝあるもの、衣食財利の前に心動いて七世傳持の家業を變移し、東貿西易、利を得るに濃きも尙胸裡一片の許しがたきを犯せる感々の情禁ぜざるもの、彼等は佛陀の自由主義を耳にして果して同生の思ひがなかつたであらうか。佛陀は四姓ひとしく出家して、本姓を失つて同一釋子となることを事實の上に立證せんがために四姓各々姓を異にするも、共に大海に入れば皆海商人と名くることを例示されたことは(22)彼らの如き、移つて商人となれるものに生活原理を提供したのである。

佛陀の思想たる四姓平等更にこゝに胚胎する自由出家の精神は、本來商人階級たりし人々と近く新たに商業取引に身を委ねたる人々とに強き生活哲學を指示し、かくして彼らに經濟活動の眞の目標を指摘し、正眞なる利財の形式を敎へ、人々相協力して和合共同の一路に進むべきを指導したのである。

(1) Cullavagga VII. 1. 4
(2) 〃
(3) Jātaka II. 200.
(4) 〃 III 362.
(5) 〃 III 402.
(6) 〃 III 362.
(7) Dhammapada 1.
(8) Samyutta. 35, 132. Dhammapada 383-423.
(9) Cullavagga V. 33. 1
(10) 〃 IX. 1, 4. 摩訶僧祇律第二十八卷
(11) 〃 IX. 1, 3.
(12) 〃 〃 Anguttara VIII. 19.
(13) 〃 VII. 1, 4.
(14) Sāmana-phala-Sutta 25, 36.
(15) Madhurā Sutta M.N. 84.
(16) 十誦律第三一卷、四分律第三十四卷
(17) 十誦律第二一卷、四分律第三十四卷、摩訶僧祇律第一十四
(18) 摩訶僧祇律第二十四卷
(19) 四分律第二十七卷
(20) Cullavagga X. 16, 1.
(21) M. N. 84. Madhurā Sutta 雜阿含二
(22) 摩訶律二八

(b)共同和合の思想と生活について

四姓平等の主張は多くの人々を佛陀の周圍に雲集せしめた。彼らは同一解脫味を嘗めんとする同志である。種姓を異にするも人生解脫なる同一目的に相面接せる人々である。茲に佛陀師主を中心として僧伽(Saṅgha)と名けられる一つの聖なる團體が成立したのである。彼等が互ひに尊敬し合ふところに和合(Saṅgha)が生れ無諍(avivāda)の調和を見る。同一白道に志すところに共同(Sāmaggi)の精神が勝き起る。(1)かくしてこゝに未知の人々は同一理想の前に固き人間協力を行つたのである。從つて彼らの中には彼ら自身の方言によりて(te sakāya niruttiyā)(2)會話するもの、遠き邊疆の異俗を動作するもの、かくの如き雜種多樣を收めてしかも靜寂平和を維持しえた。阿育(asoka)王時代の僧團に臾那迦(yonaka)、乃ちギリシャ人曇無德(3)のゐたことは何らあやしむに足らない。僧團は四方(catud-diso)を收めて餘さゞるを理想とする。しかも又、その經濟生活は完全なる共產制であり、物として四方の僧物ならざるはない。私餐獨占は佛陀の最も好まざるところであり、一衣の分配といへどもすべて公議衆論に俟つたのである。かくして、茲に完全なる共同和合の理想を實現し以て時代人をして契約的團體のより鞏固なるを示した。

一方、商人階級は血を同じくする(Salohitā)ところの親族(Ñatako)同姓の間に止まることなく、その團體は日に日に姓を越え、種を顧みずして膨脹するの氣運に向ひ、今や殆んど契約團體の形式をとるに至つた。茲に於てか、團體統御の必要を感じ、自らその範を僧團にとつたことは當然のことである。兩者は共に契約の團體であり、只目的の同一に集まつたに過ぎない。僧團は四方の比丘(Bhikkhu)を受容した。結伴を行ふときには商人が象に乘り鈴をふりすべての村々に普告募集したのである(4)。僧團が共受共產の經濟制度であつたに對して、商人團體も合資平分の方法をとつた(5)。かゝる生活上の類似は多くの商人をして佛陀の許に赴くの機會を與へたのである。佛陀は彼らのために團體統攝の四方法所謂四攝事(sangahavatthu)を說かれた(6)乃ち、布施(dāna)愛語(Piyavajja)利行(Atthariya)同事(Samānattata)である。佛陀はかくの如く人

間相愛、同朋共業の絶大にして深刻なる思想を主張されたがために、このことは商人團體確立の上にかなりに大きい内的要素となつたやうである。佛陀の信者（Upāsaka 優婆塞）手長者（Hatthaka）の如きはよくこの四攝事を利用することによつて五百人の商估を統御しその目的を達成したのである(7)。只單に利に集まるものは利に散るものであり、又眞に利を得るものではない。公利衆益のために私事を制するの反省と、利を越えたる心的結合とを欠くならば營利團體の生命は、はかないものである。彼らがよくこの弱點を佛陀の思想に補つたことは蓋し當然のことである。

人的協力と共に茲に注意すべき今一つの事實は合資の現象である。都市と村落との金融(8)村内に於ける相互の融通(9)は別として、この時代に入つて注目に値することは投資合資の如き資本の活動である。富豪は多くの資本を商人らに出資して、彼ら擧物人に取引を行はしめ、或は海上に交易せしめ、以てその利を收めた(10)。海上貿易の導師(Satthavāha)たらんとするものは二十萬金錢を必要とし、十萬弁疋、十萬資糧、と言つてゐるのは、たとへ計數として信じ難きも、とにかく莫大の資本を投ぜしを示すものである(11)。投資と共に行はれたものは同財業(12)であり、合資(13)の經濟である。これ時代經濟の自然的要求たるは明かなれども、又一方、人間協力、共同和合のさながらなる發露である。と言ふのは、佛教徒を以て任ずる須達多(Sudatta)の如き人々に於てこれを多く見るのみならず、佛陀も又貨財豐かなる者に對して常に捨財施錢の功德あるを敎へ、家庭の財産運用法に於ても、その四分の一を以て融通出息(14)に當てたる如き、みな彼が財の凝滯と固化とを好まざりしを示すがゆゑである。

合資投資のやゝもすれば陷る弊害は、その資本に對する觀念の自己の財に比して稀薄なることに胚胎する。佛陀は常に共同財の尊重すべきものであつて一物といへどもこれを捨つべからざるを敎へられた(15)。僧團には瑣物分配知事(16)(Appamattakavissajjaka)の如き職掌すら設定されてあつた。かうした佛陀の態度と商人階級の合資經濟は、最も尊重すべき資本として寺院財を海外廻易に使用するに至らしめたことは、より多少の年代上の差異はあれ、最も興味ある事實であると思ふ。無盡財物乃ちこれである。元來、かゝる制度は佛陀在世にはなかつたやうであるが、彼の死後程なく始められたやうである。無盡物といふのは寺塔營造の基本金の如きものであつて、やはり商人階級や自由思想家の多い毘舍離(Vesāli)で商人の手で創められ、その基本金を海陸交易の資本に翻轉し、以てその利得造を營の資に當てたのである。その詳細については自分は稿を改めたいと思つてゐるから茲には略して置く。

かくの如く和合統攝の結侶結伴についても、更に又、出資合資の實際的運動についても商人階級が佛陀、並びにその僧團に負ふところ極めて大なるものがある。かくして商人團體はその新らしき企圖たる契約團體の生活原理、指導的法則、並びにその經濟分配の原理についてその生ける規範を僧團に求め、佛陀又進んで彼らのために團體的道德と公共的精神と、更に又最も美しき犧牲的精神を鼓吹したるのみならず、又有より無に、富より貧に、施捨放散するの美德を敷へ、以て長者商主をして安んじて、且つ競つて出資せしむるに至つた。誠に佛陀の和合思想と僧團生活とは商人團體に目足を與へたるの

観がある。

(1) A. N. VIII. 10.
(2) C. V. V. 33. 1
(3) 善見律二
(4) 十誦律二五
(5) Jat. II. 218
(6) 原始佛教思想論三四五、參照
(7) 中阿九手長者經 A. N. IV.
(8) Jat, III. 320.
(9) 〃 II. 199.
(10) 十誦律、一八、二六、三七、四分律五三Jat. II. 291.
(11) 十誦律二五
(12) 四分律一
(13) Jat. II. 218.
(14) 中阿三三
(15) C. V. XI. 1, 14.
(16) 〃 VI. 21. 3.

(c) 在家の宗教と道德について

四姓平等と和合共同の思想の前には一人の拒むべき人もなく、一法の客むべき思想もないのが幽遠なる瞑想を重んずるところよりして、出家(Pabbajita)林行の仙人を主として、營々利に走る在家(sagahaṭṭha)を顧みることのなかつたに對して、佛陀は精神的自覺の當初よりしてこれら在俗の人々に對する顧念をすてなかつた。勿論僧團出家の生活を以て第一義としたるは明かなるも、これと平行して常に世俗的、遍通的なる思想を主張されたのである。彼は精神主義の人であつたがために、袈裟衣(Kāsāvaṃ Vatthaṃ)のみを着たればとて尊ぶべき出家ではなく(1)、決意と努力に富める在家は出家と同一の結果をうべきを保證せられた。一人の信者はかう言つた。

「瞿曇(Gotama)よ、恰も恒河(Gangā)が海に傾き、海に向ひ、海に注ぎ、海に入りて靜かなるが如く、此の如く、瞿曇に從ふ者は在家出家共に涅槃(Nibbānaṃ)に傾き、涅槃に向ひ、涅槃に注ぎ、涅槃に入りて靜かなり。」(2)

かゝる在家出家、平等證悟なる宗教上の機會均等の思想は、在家、とりわけ經濟力の中心勢力たらんとしつゝある商人階級に對してどのやうな惠福でありえたであらうか。彼らは競つて佛教僧團の第二次的團體たる在俗信者、乃ち優婆塞(Upāsaka)信女、乃ち優婆夷(Upāsikā)たらんことをつとめた。佛陀は彼らに對して經濟活動の眞の目的を提示し、且つ利を貪るに急なるがために邪命乃ち不正職業に走るなからんことを敎へ、以て在家佛敎、居士(Gahapati)大姉の庶民宗敎を樹立したのである。その細目については優婆塞戒經七卷に盡されてゐると思ふ。勿論この經典の成立はかなりに後世のものではあるが新古雜載の形をとつてゐるがために多少參考になると思ふ。

其はとにかく、佛陀はこれら信者在家に對して、彼らの經濟力の用途につきほゞ二つの形式を示したやうである。前者は僧團に對する衣食住の供給、後者は一般社會公共の事業に對してゝある。

(イ)僧團に對するもの

佛陀並びに彼の弟子はその經濟生活を乞食の形式にみたしてゐた。午前は彼らの町村乞食の定時であつた。その衣服は多く拾ひ集めたる糞掃衣や、在家信者の功德行に俟ち、その住所は初期に於ては雨期を除いて樹下林園に求めてゐたやうである。然るに在家信者の增加と有勢とは衣食住についての顧慮を愈々少なからしめたのである。

在家と出家と二者互に相依りて無上安隱の正法を精勤す。衣服飲食臥具は在家、畏怖の排除は出家之に酬ふ。」(3)

在家に法施(dhamma-dāna)を與ふることに客

ならざる佛陀は又在家に財施（āmisa-dāna）を要求(4)するに躊躇しなつかつた。茲に相互的利用の妙味があり、且又兩者の微妙なる關係を見る。佛陀の僧團の人員について前後に非常の差があり、初期少數の間は各地を巡行乞食して何らの支障を來さなかつたけれども後年千二百五十人と言ふが如き多數に達しては、勢ひ一般民衆のよく堪えうべき所でないがゆゑに、至るところに霜雹蝗蟲(5)の批難を受けるに至つた。茲に於てか勢ひ最も經濟力ある在家信者の經濟的援助を仰がねばならなくなつた。王舍城の居士は六十の毘訶羅(6)（Vihāra）乃ち僧房を營造し、更に佛陀から毘訶羅、伽樓陀翼の形をなせる家（Addhayoga）樓臺（Pāsāda）平屋根附の石屋（Hammiya）土窖（Guha）の五種屋建造の許可を得た(7)。佛陀又かゝる僧房營立の功德最勝なるを宣べられた(8)。がために、金衛城の長者須達多は祇多太子（Jeta）の所有園を僧團に供養せんがために、所有の貨幣（Kahāpana）を林地に敷いて所謂祇園精舍を建設し(9)、舍衛城の信女、鹿母毘沙伽（Migāramatā Visākhā）も又その東園（Pubbārāma）に鹿母講堂(10)（Migāramātupāsāda）を建立供養したるのみならず、更に僧房の調度品(11)家具を供養したのである。かくして從來固定の住所（Senāsana）なかりし比丘等が各地の僧院に分屬するの傾向、更に又佛教寺院の基をなしたのである。今や、佛教徒は目に見、手に觸れうる底の現實的、經濟的基礎を確立したとも言ひうる。これ佛法は僧衆に永住し、僧衆は僧院に永住し、僧院は又その財に永住する所以の基をなしたがゆゑである。かゝる經濟的援助を與へたる信者に對して比丘の一人はかう言つた。「友よ、大長者須達多と大信女毘沙迦とである。彼らは比丘僧伽の保護者（Upakārakā）であり、母父の位置（Mātāpitiṭṭhāna）にあるものである」(12)と。

かゝる僧團の保護者には須達多、毘沙迦の外に尙幾多有力なるものがあつたことは明かであるが、經典に現れたる所によれば マッチカー村（Macchikā-sanda）の長者質多羅（Citta）阿臘毘（Āḷavi）の手長者（Hatthaka）毘舍離（Vesāli）の長者優竭（Ugga）アムバッタ（Ambattha）の勇長者（Sūra）(13)の如きものである。

彼ら商人はかくして今や佛陀と僧團とを供養することによりて彼らの職業と意義とを見出した。「師主よ吾らは商用にて長き旅行をなさんとす。商品を賣り、利を得て幸にかえり來らば再び禮拜せん」(14)とは彼らがいかに危難多き旅路に佛陀を憶念しつゝあつたかを見るべきである。迦旃延の估客弟子は海上貿易から土產として貝製器具を送つた(15)。又店市の商估は屢々自らの店肆や市肆や四衢道路で僧衣を施捨したり、

(16) 或は又數人共同で所謂、共同布施（Gaṇadāna）(17)が行はれた。かくの如く商人階級は比丘僧團の擅越（dānapati 施主）としてその衣食住の支助をしたのである。

以上是を見るが如く、商人階級、特に其有力者が僧團を保護し、その經濟力を佛陀のために喜捨したこと、佛陀又彼らの好意を受納し、經濟と思想との相互交換に成立したるこの密接なる關係は愈々兩者の興立と發展とを刺戟し拔く可からざる地歩を兩者に建設せしめた。この點ムーケルジ(18)、（Mookerji）オルデンベルヒ(19)の既に指摘してゐる所である。

（ロ）一般公共事業

施（dāna）戒（Sila）生天（Sagga）の三思想は佛陀が在俗者に常に說くところ、施は貧窮を助け、苦惱を拔く所の慈善の謂である。當時の殘忍なる犧牲祭祀、乃ち佛陀の所謂邪祭會に對して、彼

は施會慈善の救貧事業を賞讃した。勿論、從來から王者の義務として一都市に六福舍(20)(chadānasālaya)を建立して貧者に施食を行つてゐたのであるが、佛陀の思想にとり入れられて以後は佛教を名としてその文化の流行と共に傳持された。佛陀は又更に、交通行旅の利便を計るために多くの公共事業をすゝめられた。諸々の園樹を植え、橋梁を架け、船を作り、園林には果實をうえしめ、浴池を作り、曠野には泉井をうがつて人畜の渴を醫せしめ、福德舍を作り、行旅のために客舍居止を供することである(21)、何故にかゝる交通に關するものゝみを德目に數へられたであらうか。思ふに當時の交通が尙未發達の狀を免れずして、しかも最も社會がこれを必要とする氣運に向つてゐたこと、佛陀の一生が殆んど巡歷に盡されて居り、常に是を目擊されたこと、用に二回完行はれた布薩會(Uposatha)には三由旬(Yojana)の四摩界(Sima)の比丘らが集會懺悔に必ず來集せねばならなかつたこと、更に又恐らくは高人階級と近親の關係にあつた彼が彼ら自らのために是を選ばしめたること、是らの多くの推測が許されると思ふ。この思想は阿育王第二の石勅に「路傍樹を植え、井をうがち以て人畜の用に供す」なる文字として現れ、佛教の流るゝ所必ずその跡を見る　かゝる公共事業が特に商人階級に甚大なる便益を與へ、佛陀を信じ、佛語を行ふものは反つて彼ら自らの根を培ふものなりとの信念を愈々固からしめたのは誠に興味あることである。奈良朝に於ける布施屋、並びに優婆塞の架橋のことなど對照せらるべきである。

(1) Dhammapada 9
(2) 增一阿二九
(3) Itivuttaka 107
(4) 〃 〃 〃
(5) 十誦律二六
(6) C. V. VI. 1, 3.
(7) 〃 〃 2
(8) 〃 〃 5
(9) 〃 VI. 4, 9.
(10) 〃 V. 1, 1.
(11) 〃 V. 22, 1.
(12) Jātaka III. 337.
(13) 根本佛教三八四參照
(14) Jāt. II. 256.
(15) 十誦律三九
(16) 〃 二七
(17) Jā. II, 180.
(18) Local Government in ancient India p. 50-52
(19) Buddha S. 429-435.
(20) Jātaka II. 193, 276.
(21) 四分三三、四〇、五〇、摩訶四、長阿二、雜阿三六

(d)　傳道遊行の生活

佛陀の一生は遍歷勸化そのものであり、足跡の及ぶところ又廣汎であつた。佛弟子も又初期の住所定まらざる間は、東西雲水の如きもので

あつたがために、彼らは食物と飲水と宿所と方向とに苦しまねばならなかつた。佛陀すらも旅行中食物もなく遂にに馬麥を食したことは名高い話である。弟子等は賊(Cora)を畏れながら天祠(devakula)(1)に宿泊し、飲水と洗水とを用意し、星座方位(disabhāgam)(2)を了知して巡行する。佛陀の傳道の宣言、「汝等遊化せよ。多人の幸福と安樂のために、世間の憐愍のために、人天の利益幸福安樂のために。同一の道を二人して行くこと勿れ。」との痛切なる言葉に勵まされて彼らは皆ひとり行つたのである(3)。然し彼等の任務は余りに大であり、道路(Maggam)は余りに險しかつた。然しとにかく彼らは師命を奉じて西方土(Pacchabhūmi)北方(Uttara)南方山(Dakkhinagiri)に巡行した。けれどもいつとはなしに彼らの同行者は多數となつてゐた。

一方、行商、隊商らも或は涯しない沙漠に、或

は賊難多い森林地に、或は吠舍離地方のやうに雜草に道を失ふやうな濕地に、風雨惡獸と戰ひ乍ら彼らの旅をつゞけて行くのである。彼らは糧食資具には豐富であるけれども、涯しない旅路に家鄕を回憶する時必ずや涙なきを得なかつたであらう。かうした思想と慰藉に心渴いてゐた彼らが佛陀の巡歷に隨逐し、以て豐樂と安穩とを得やうとしたことは當然なことであらう。かくして茲に商人行旅と比丘の遊行との間に又一つの對照と接近とを見たのである。

佛陀にあはんとし、邊地に傳道せんとし、布薩會に出席せんとして、比丘らは今や估客と同行するに至つた。比丘等は時に大澤を經過する時貴重なる水食を賈客に乞ひ(5)、或は曠野に於て病を得て歩くことが出來ず、商人から乘馱を仮借したり(6)、或は同行の中道で共に一處に宿泊したり(7)、すべて彼らとの同行によりて多くの便益を與へられたのである。同行と言つても多くは隊商車の後から、塵埃をよけるのと、車聲をさけるのとのために歩いたやうである。商人も時には比丘らに助力を仰いだやうであつて羊毛車(8)や油車(9)の車軸が途中の險難處で折れたとき、その一部の運搬を依頼したのである。かゝる資料は諸律の至るところに見るのであつて、「諸比丘共估客遊行」とは諸律の通說と言つても過言ではなからう。更に稅關の設置以後に於ては估客は特に比丘と行を共にせんとし、以て輸稅量を輕からしめんと願つたのである(10)。

(1) 摩訶律八
(2) C. V. VIII. 6, 1.
(3) Dhammapada 329　參照
(4) 十誦律一五
(5) 同　六一
(6) 摩訶律二八
(7) 同　三
(8) 十誦律七
(9) 同　三九
(10) 摩訶律三、三七、十誦律一、五八、四分律一

三、結　論

以上、自分は極めて概略ではあるが、商人團體の日に昌隆せんとする實狀と、一自由思想家佛陀の思想が旭日の勢を以て興立しきたつた事實とを對照せしめることによつて、ほゞ兩者の關係の親密にして相助的であつたことを述べて置いた。誠に、若し有力なる商人階級の保護援助がなく、佛陀の信仰團體に在家信者の姿を見せなかつたとするならば、恐らく佛教は古代の印度以來現代に至るまでに產出した無數の聰明なる哲學者の學說の一つとなつたにすぎないであらうし、只佛陀も八十の老齡に至るまで修行者の頭梁として只涯しもない遍歷に終つたであらう。然るに、印度の土が產んだ數ある哲學者の內、ひとり佛陀のみ悠々二千五百年の間、アジヤの大部分の精神的父たりえたのは一體何の故であらうか。素より思想の優越も數へらるべきではあるが、その一二を除いては大部分是を前史の中に求めることが出來る。原因を人格にのみ仮することは又史家の愼しむべきところである。自分はこの意味よりしてかなりの重き原因の一部として政治經濟の關係を數へなくてはならぬ。この點よりして本論の目的とする商人階級との關係の如きは忘るべからざるものであると思ふ。

雲水のやうな薄弱な佛陀の團體に對して、商人らが與へた僧房精舍資具衣食は萬鈞の重きを僧團に加へたのである。況んや彼らが隨次僧房に喜捨した寺財は遂に常住物として正法を久住せしめたるは當然である。勿論かゝる豐かなる寺財僧房の喜捨が反つて比丘らの遊行的精神を減殺し、自坊に安坐定住するの弊風と、僧房に

局限せられて宗派各部の狹き偏執を生せしめたるの短所はあれ、是みな隨用者の惡德のいたすところであつて何らその施與者を責むべき根據を持たない。

佛教が彼らに與へた關係も同じである。佛陀に面接したるところに、彼らは自らの生活哲學を確認し、經濟生活の目標を覺るにいたり、堂々たる陣容を整へて思ふざま活動することが出來たのである。かうした兩者の關係は佛陀の死後、益々濃厚となり、阿育王時代の隆盛なる佛教に於ては塔婆(Thūpa)聖地の巡禮 宣教師の派遣佛教大會の執行のすべてに兩者の表裏作用を見るべく、大乘(Mahāyāna)運動の如きも在家的氣分、商人勢力の著しき反映を見ることが出來るのである。西域西藏支那に流傳せる佛教、更に入竺求法の跡を見るに是又彼此の交易の兆なきを得ない。法顯以下の支那入竺僧の紀行錄が常に產物に注意し交易を逸せざるもの、又所以なきものではない。朝鮮日本に普及せる佛教、更に入唐求法の英傑の往來、內地佛教の地方的分布、足利五山の天龍寺船の如き、一として兩者の關係史ならざるはない。

宗教と經濟、信仰と營利、佛教と商業、比丘と商人、乞食と行賈、かうした一見するところ、水火の如き兩極端に位置してゐるやうに見えるものも、時間と空間といふ二つの殼子のふりやうによつては、忽ち互ひに綿々分離しがたき因緣を結ぶものである。自分はかうした偶然的な必然を偏へに興味深く考へてゐる者である。

（大正十四年一月十四日）

カール・ディールの資本理論に就いて

金原賢之助

一

從來多數學者の認めて以て生產の要素と爲せしものは、通例勞働、土地及び資本の三者である。而して資本の生產上占むる地位に關して、嘗ては之を過重視せし論者もあつたけれども、當今に於いてはその此上に有する地位は實に第二義的のものであつて、前二者と全く同一視す可らざるものなることは、一般に承認せらるゝ所なるが如くである。然るに、「然らば資本とは何ぞや」の問題に至つては、之に對する解答は區々として歸一する所を知らざる有樣である。洵に『資本』なるものは、吾人が更めて茲に贅言を弄するまでもなく、經濟學上に於いて最も紛糾せる概念の一となれるものであつて、吾々斯學研究者の興味を唆る一個の問題である。而して本稿は、此間に在つて獨乙經濟學界に於ける一方の權威者たるカール・ディール教授が此問題に對して果して如何なる見解を持せるかを、觀察するを目的とするものである。

從來行はれし資本學說を觀るに、之を分つて二種に大別することが出來る。一は自然的 純經濟的資本觀であり、他は歷史的法律的資本觀である。前者は、通例經濟學に關する著書に於いて先づ第一に(主として生產理論に於いて)與へらるゝ資本の觀念である。例へば生活必需品を獲得する爲に徒手で努力する人を描寫する場合には、先づ『クルウソオの經濟』を述べるのが如何なる著書に於いても例となつてゐるが、其如何なる書物に於いても、かのクルウソオに其